

佐藤友彦師所蔵 九冊本間狂言「末社 脇能 九下」

飯塚 恵理人\*

要旨

この九冊本からなる間狂言本は、現在和泉流狂言方佐藤友彦師が所蔵されているもので『国書総目録』第六卷「能の本」の間狂言の本に「山脇家間之本 九冊」山脇元康氏所蔵として載るものであり、以前に故表章氏が御覧になった際、「内容的には大蔵流のもので、貞享松井本、筑波大学本と並び、大蔵流の間狂言本として最古に属する内容ではないか。」と筆者に言われたことがある。この間狂言本についてはすでに『名古屋芸能文化』第一三号に第一冊を翻刻しているが、今回第二冊目の翻刻を掲載させて頂く。内容に関する吟味は後日とし、とりあえず本文を翻刻・紹介させて頂きたい。

(凡例)

底本に忠実に翻刻することを心がけたが、読解の便宜を考え、以下の点について改めた。

- 1、旧字体は原則として新字体に改めた。
- 2、私に句読点を施した。
- 3、能の曲名は《》で囲んだ。

4、底本の書き入れは（ ）で囲み、その書き入れの該当部分に示した。

5、底本の墨消ちとなっている部分は【 】で囲んだ。

(目録)

- (20) 《賀茂》(21) 《難波》(22) 《白鬢》(23) 《嵐山》(24) 《白楽天》(25) 《寢覚》(26) 《源太夫》(27) 《小鍛冶》(28) 《鶴羽》(29) 《道明寺》(30) 《和布苅》(31) 《九世戸》(32) 《江嶋》(33) 《松尾》(34) 《雨月》(35) 《鶴祭》(36) 《玉井》(37) 《絵馬》(38) 《七夕》(39) 《熱田》(40) 《浦嶋》(41) 《まないの原》(42) 《孫思邈》(43) 《持統》(44) 《西王母》(45) 《東坊作》(46) 《養老》(47) 《金札》(48) 《大社》(49) 《氷室》(50) 《竹生嶋》(51) 《同》(52) 《鶴亀》(53) 《皇帝》(54) 《賀茂御田》(55) 《白髭道者》(56) 《追松》

(20) 《賀茂》

か様に候者ハ都かも明神につかゑ申まつしやの神にて候。まことにはハ申までもなき事なれども我朝ハ小国とハ申せども神国にて

あれハ佛法はんじやうしてわういめでたき事なれハ、たミ百姓にいたるまではんじやういたし、めでたき御国なり。左様の事も神国のゆゑとかや。是と申もとにかくに国く在く所にれいしんあまた地をしめて御ざ有ゆゑなり。中にも当社の御事ハわうじやうのちんじよにて天下をまふり給ふなり。去程に当社のいにしへをいかにと尋るに、昔此かもの里にはだのうぢ女と申人、あけくれかも川に出て水をむすび神にたむけ申され候ところにまことに神もなふしうましますか、又神へんげの事なるにや、有時みなかミよりしらはのや一つながれきたつて、むすび給ふおけのうちゑながれ入候を何となくとりて我屋に帰り、のきにさしおかれ、かのうぢ女程なくわいにんとならせられて則十月と申に御さんのひぼをとかれ候へハ、玉をのべたるごとくなる男子をうめり。此御子三さいになり給へハ、あたりの人、扱汝のち、はいかやうなる御方ぞと尋申せハ、其時のきにさしおきたるやにゆびをさし、ちハあれよとおほせ候へハ、なんほうぎどく成事にて候ぞ、かのやハなるいかづちとなつて天にあげり給ふ。是則わけいかづちの神是なり。さあるによつて其御母御子をも神といわひ申、かも三所の御神と名づけ下がも上がも中がもとてれいげんあらたなる御神にてまします。それに付、ばんしうむろの明神の神しよくの御方当社参御参有、明神うれしく思召て、むかし水くむ給ひたるていにもてなし、かりにあらわれ出て御ことばをかわし御申有、かさねてきどくをミせ申されうする。其間御まちどをにあらうする間、我等がやうなるまつしやにも罷出でなぐさめ申せとの御事により是まで出て候。かのまれ人ハいづくにわたり候ぞ。しらぬよ。さればこそ是におじやるよ。いそいで御礼を申さう。御礼申候。是へ出たる者をいかなる者ぞとおぼしめされうするが、是ハ当社につかへ申まつしやの神にて候。此たびの御参

けいめでたう存る。只今あらわれ給ひたるハうたがふ所もなき当社明神にて候。しからハかさねてきどくをおがませ申されうする。其間おまちどをに御ざあらうする程に、我等がやうなるまつしやにも罷出一曲をも仕りなぐさめ申せとの御事なれども、なにもぶてうほうなる者の事にて候が、さりながら御なぐさみに一曲いたさうかいたすまいかや。あゝ畏た。一だんよい時分に申た。一曲よからうとおもはれて、につことわらわれた。それがしもいにしへまいをまふた事が有程にひとさしまふておめにかけう。めてたかりける時とかや。まい有。あらくめでたやくやな。かゝるめでたきおりからなれハ、我等がやうなるまつしやの神もあらハれ出てうたひかなで、是までなりとてまつしやの神ハ、くもとのやしるゑかへりけり。さらハ御暇申。

## (21) 《難波》

か様に候者ハ津の国難波の梅のさねのせいにて候。去程に此難波の梅ハ天下にかくれもなき名木にて候。それをいかにと申に、いにしへ仁徳天わうをいまだ難波のわうじと申て御ざ候御時、うぢのみこととたがいに御くらいをじじ給ひてミとせの間御くらひさだまらす候によりいかゝあるべしとの御事なるにはくさい国よりわうにんと申すさうにんわたられ候間、しからハ此人にうらなわせ御申あるべしとて、いづれか御くらいにつき給ひて目出たかるべきぞとうらなわせられければ、わうにんうらかたにひき合申さるゝやうハ難波のわうじ御くらいにつき給ハ、めでたかるべしとうらない申されしかハ、さあらばと有て難波のわうじ御くらひにつき給へハ、いよく国もおさまりめでたき御代と罷なりて候。其時わうにんの哥に、難波津にさくや此花ふゆごもり、いまを春べとさくや此花とよませられ候によりて、此難波の梅ハかくれもなき名木にて候。それ

につき当今につかへ御申有臣下殿、此花の事きこしめされ御覧あるべしとて、只今此所へ御出にて候間、わうにんのよろこびかぎりなきて、やごとなき姿にげんじ、まれ人に行合此花のやうだい、其外かめでたきさいども念此に御物語あつて、先御帰りなされたるが、今夜ぶがくをそうしてなくさめ申さるべきとの御事にて候。わうにんハ太鼓のやくにて候間、太鼓をいかにもけつかうにつかまつてもちて参れとの御事にて候程に、是までもちて罷出て候。どこもとにおいてよからうぞ。爰元がよからうか。いや／＼是ハわるさうな。たゞ是がよからう。おいたり／＼。さて太鼓をハおきすまいた。何事がな一曲仕りたいが、何がないたさうやれ。いや／＼日此いたしたるハかやうの時のためにて候。さいわいの事じや。笛をふかう。何からふかうぞ。先ねとりをくらわせう。さらハちとゆりをふかう。いやふけハふく程御きげんかよい。そうじてじやうすのげいハかしましうないと申か、それかしハ上手やつつとうしろでふくやうな。今度ハなが／＼と舞をふかう。あゝよい天気にてとびがなく。ひいよろ／＼よろ。

(22) 《白鬢》

か様に候者ハ、江州白鬢の明神に仕ゑ申、まつしやの神にて候。まことにめてたき事にて御ざ有ぞ。国／＼にれいぶつれいしやあまた地をしめて御ざ有と申せども当社の御事ハご、百歳よりいまにかくれもなき御神の事にて候。其しさいハむかし積尊とそつ天よりあまくだり、是より東に仏法ぐづうの所を御たて有べしとて、あしのはにめし、まん／＼と有くうかいゑ風にまかせて御出候ところに、当国しがのほとりにて浪のうつおとをき、給へハ、一さいしゆじやうしつづうぶつしやう如来しやうじうむへんやくとたつて候。積尊きこし召、則是にて佛法かいひやくあるべきとて、めしたるあしの

はをぬぎすて給ひて候。其時つりのおなれども御見にあいてゑきなけれハ、いま迄見ゑす。此山のぬしわ我なり。積尊此所にて佛法をひろめ給へとてかたく御やくそく有。薬師如来ハ東へとび給へば、積尊ハしやつくわうどにかへらせ給ふ。其時のおきなハ当社白鬢の明神にて御入候。されハ積尊其のちでんぎやう大師とむまれかわりひゑいさんに上り、くわんむ天皇と御心を一つにして、延暦年ぢうにひゑいさんをたて給ふ。さあるによつて寺号を延暦寺とハ申なり。其しさいをもつて、こんぼん中堂ハ薬師如来をあんじ申されて、かゝるじんべんなる佛国ハあるましいとの御事にて候。是ハ此所にてのむかし物語。只今たうぎんにつかへ御申有臣下殿せんじにまかせ参けい被成候間、当社明神かりにつり人となり臣下殿に大かたじんび御物語被成候が、かさねてきとくをおがませ申さうすとて先しやだんゑいらせ給ひて候。其間たゝハ何とて御ざあらうするそ。我らがやうなるまつしやにも罷出、何ぞ一曲仕りなくさめ申せとの御事により罷出て候か。臣下殿はどこもとに御ざ有ぞ存ぜぬよ。されハこそ是に御ざ候。扱も／＼きらびやかなるていかな。あのやうななかへ我等がやうなるいてにて御礼申事ハ中／＼なるまい。さりなからくるしからぬ事、御礼申さう。御礼申候。是ハ当社明神に仕ゑ申まつしやの神にて候。是までの御下向、ちかごろめでたう存る。さいぜんあらハれ給ひたるハ当社明神にて候。かさねてきどくをおかませ御申あらうするとの御事にて候。其間お待どおに御ざあらうする間我等にも罷出、一曲仕なくさめ申せとの御事により罷出候。何ぞ一曲いたさうするか。畏て候。やれ／＼一段の御きげんに申上た。一曲いたさうかと申たれハこなたのほうがにつこといたいた。急で一かなでいたさう。めでたかりける時とかや。まい有。あら／＼めてたやめてたやな。かゝるめでたき折かなれハ、

我等かやうなる末社の神もあらわれ出てうたひかなで是までなりとて末社の神ハくもとのやしるに帰りけり。

## (23) 《嵐山》

か様に罷出たるハ和州三吉野のざわう権現に仕へ申、まつしやの神にて候。去程に申迄もなき事なれども我等がすむ吉野山ハ天下にかくれもなき花の山にてミねもおのゑもみな花ばかりにて候。其中にもちもとの桜と申ハとりわけかくれもなき名木なり。是を君きこしめしゑいらん有たく思召せどもゑんまん十里のほかゑハみゆきなりかたき間、さあらハちもとの花のたねをとりよせ、都の西、嵐山と申所にうゑおかせられ、それゑ御幸あつて花をゑいらんあるべきとて、ちもとの桜のたねをとりて嵐山ゑうゑうつし給へハ、もとより君の御めぐみふかきゆゑ、花も心ありてさかゑ候事かぎりなし。ことさらこもりかつての両神毎日やうがうあつて花をもらせられ候程に、ふく嵐も嵐山をよぎてふき申により一段とすぐれて見事なるやうたいにて候。しかれハ当今につかゑ御申有臣下殿花のさかりを御覧あつて御そうもんあれとのせんじをかうふり嵐山ゑ御つきにて候處にこもりかつての両神御よろこびかきりなくて先かりにいやしき者のすがたとげんじ給ひ御ことはをかわし申されて候が、しかれハかさねてきどくをおがませ御申有べし。左様にあらハ其間たゞハ何とて御ざあらうするぞ。我等がやうなる末社にも罷出、何ぞ一曲を仕なぐさめ申せとの御事により、是まで出た。いそぎ嵐山ゑ參らばやと存る。いや神通をゑたれハはや嵐山につきて候。かのまれ人ハいづくに御ざ有ぞ。いや、されハこそ是に御ざ有よ。やれくきらびやかなるていかな。さすが当今の臣下殿にて御ざ有ぞ。見事さいらかをならべてつくくとして御ざ有。此ぶんにてハ一曲仕つてもいかやうなる者ぞと御ふしんなされうする間、御礼申てから一曲

致う。御礼申候。是ハ三吉野のざわう権現に仕ゑ申末社にて候。是迄御出によりさいぜんこもり、かつて両神かりにあらわれ給ひ、御ことばをかわし申された。しかれハかさねてきどくをおがませ申されうする。其間たゞハ何とて御ざあらうするぞ。我等にも何ぞ一曲をも仕り御ねふりをもさまし申せとの御事により、かりそめながら御礼申上候。何ぞ一曲仕らうか、いたすまいかや。あゝ畏た。やれく一段の御機嫌に御礼申た。何ぞ一曲よからうと思召たやら、みきのほうがにつこりとした。それかしもいにしへまひをまふた事か有程に一かなでかなてう。めてたかりける時とかや。あらく目出度やくな。かかるめでたき折からなれハ、我等かやうなるまつしやの神も、あらわれ出てうたひかなで、是までなりとて末社の神ハくもとのやしるにかゑりけり。

## (24) 《白楽天》

是ハせつしう住吉の明神につかへ申末社の神にて候。去程にめつらしからぬ事なれども、我朝ハ小国とハ申せども神国にて、佛法はんじやう何事もめてたき御国の事にて候。然る所に大唐よりも我朝をうかゝい申。其しさいハ唐の太子のひんかく白楽天と申者、是ハ大唐にてもかくれなきちゑ第一の者にて候が、日本ハちゑ第一の国にてあれハ、楽天日本ゑわたつて日本のちゑをはからゑとの御事に、すでに日本ゑをむく。住吉大明神此事御存し有て楽天に我朝のちゑをはからわれてハかなふまじい。先其楽天を日本の内ゑ入たてまじきとおぼしめして、ぎようわうのすがたにげんし、せうせんにめし、つりばりをもたせられて、たゞつり人のていに西のうみ、ひせんの国、松浦か沖まで御出候へハ、彼白楽天じゆんふうにほをあげてきたる程にほどなふ明神の御ざ有所多きたる。明神もちゑ第一の白楽天なれハ、何とかことばをかけうすらうと一大事にあはし

めして御ざ有ところに、楽天是を見付て、いろ／＼ふしんをなし、扱日本には何をもてあそぶぞと申されしかハ、明神日本にハ哥をよみてあそび候。扱又唐にハ何をもてあそび給ふぞとおほせ候へハ唐にハしを作つてあそぶ。いでもくぜんのやうだいをしに作つてきかせうすると申て、せいたいころもおびていわほのかたにかゝり、はくうんをびにて山のこしをめぐる。心得て有。かせうと申、明神あふ面白う候。日本の哥もた、左様の事にてこそ候へとてやがて、こけ衣きたるいわほハさもなくてきぬ／＼山のをびをするかなと、かやうによませられ候へハ、楽天大きにおどろきて、扱／＼日本にハあれていのきよふだにもかやうの哥をよむ。じやうらうたちハさそあるらんと申。明神中／＼の事、日本ハちゑ第一の国なり。哥などの事ハ我等ごときの者は申にをよぼす。ちくるいてうるい、かわづまで哥をよミ候とて、其せうこども御物語被成たれハ、さばかりの楽天もよは／＼となられたる間、其時明神我らいけんを申さう。日本の都へ御入ありてハ、をためいかゞな。是よりそろりとおもどり有てしかつつべしいと御申ありたれハ、楽天もがてんせられ、すではやもどるべしと候へハ、明神さあらはしばらく御まち候へ此たびのかいろにをもむき給ふりよはくのつれ／＼をぶがくをそうしてなくさめ申さうするとの御事にて候。いや神通をゑたれハひとりごとを申内に松浦がうらに付て候。されハこそあれに見ゑたるハ楽天が舟にて有。まづハおびた、しき事かな。さりながらちか／＼とよつてことばをかけられてむざとしたる返事などして見かぎら／＼はいかゞ有へし。是からくりかけう。めてたかりける時とかや、まい有。あら／＼めでたや／＼やな唐土にまさる神国なれハ楽天がちゑもかなはずしてもとるべしとの御事なれば是までなりとて末社の神ハ／＼もとのやしろに帰りけり。

## (25) 《寝覚》

これハしなの、国木曾のかうりねぎめの床にすむ山の神にて候。先此ねぎめの床と申子細ハ役行者しばらく此所に御ざ有くわんねんのねふりをさまし給ふゆゑにねぎめの床とハ申候。又三掃の翁と申ハ出生もなく出所もしれず、たゞこつぜんとあらはれ出て、此所にぼうぜんと月日をおくり給ふ程に年寄はくはつとなり申され候。然る所にいづくともしらすどうじのごとくなる者一人きたり、彼翁に申やう、薬をあたへわかくなして参らせんと申程に彼翁悦び、なにとなく薬をうけてたへられけれハ、やがて其身もやわらぎ心もすゞしくはやじやくはいの心ちいて十七八のはたへに成給ふ。翁悦び、なをも此所にすまい致さる。此年月かさなりておとろへ候へハ、まゑかど薬あたへたるどうじ参り、又薬をあたへわかくなし三どまでわかやぎ候ゆへに三掃の翁とハ申なり。しかれば此事君きこしめし、ちよくしを立られ三掃の翁のじゆみやうめでたき薬のいとく御尋あれとの御事にてちよくし此所へ御下向にて候間、をきなも嬉しくおぼしめされて、かりにちよくしにゆきあひ只今申たるとをりの物語なされた。すなわち三掃の翁と申もいろうぶつのげげなり。ちよくしにしばらく御まちあれ、ぶがくをそうしなくさめ申さうずるとて先御帰りなされた。我等もいろうぶつゑのほうこうにぶがくを御まちかねあらうする程に、御札を申て何にても一曲仕りちよくしをなぐさめ申さばやと存、是まで出て候。ちよくしハいつくに御ざ有ぞ。参りて見申さう。やれ／＼嬉しや。雲の上人を見申事も此山にすむゆへにて候。いや是に御ざ候よ。扱もぎらびやかな事かな。いらかをならべたごとくにつつく／＼として御ざ有よ。あのやうなけつかう成所へ此ていにてハ出られまいかと存るが、何としてよからうぞ。いや／＼よく／＼しあんをするに山の

神がぶん臣下殿のまねハなるまひ程にくるしからぬ事、此でいにてなりとも御礼申さう。御礼申候。是ハきやうがつた者とおほしめされうが、此山にすむ山神にて候。只今の御下向めてたう存る。それがしも何そ一曲仕り御なくさみにいたさうと存るが、たゞし何と御ざあらうするぞ。やあ、畏た。さすが都人で御ざ有ぞ。よからうと思召か、物をハおほられて左のかたのほうがつこくといたく程に一曲いたさうと存る。めでたかりける時とかや、まい有あらくめでたやくやな。じゆみやうめでたき三帰の翁も葉のいとく、かゝるめでたき事あるましと、我等か様なる山の神も顕れ出てうたひかなで、是迄なりとて山の神ハくもとのすミかゑ急ぎけり。さらハ御いとま申候。

## (26) 《源太夫》

か様に候者ハ尾州熱田の明神につかへ申末社の神にて候。去程に国々にれいしんあまた地をしめて御さ候中にも当社の御事ハ日本第一かくれもなき御神なり。其子細は神代の御時ハそさの尊と現じ出雲の国に御ざ候。其折ふし、ひのかわかみに、ていこくするこゑきこへ候程に、ふしんにおぼしめし尊いたりて御らんすれハ、老人夫婦の中にうつくしき姫をいだきてなげき候間、いかなる者ぞと御尋あれハ、我ハ是てなづち・あしなづちと申夫婦の者なり。又是成はいなだ姫と申て我等がむすめなるが、此所に大じやの有に、いけにゑをそなへ候が、今度ハ此いなだ姫がぼんにあたりたる程に、それをなげき候よし申。尊きこしめし、ごんごうだんふびんなるしだひかな。さあらハ其姫を我にゑさせよ。大じやのなんをのがすべきがいかにと御ぢやうある。老人大きによろこびまいらすべきと申。尊、扱其大じやのやうだいハ何と有ぞと尋給へハ其大じやハ七尾七田にぶさがつて、どうは一つかしらハ八つ有と申。尊きこ

しめし、さあらハたくミ出し給へる事有とて、大きなさか舟を八つ御さ、せあつてそれにさけをたゝゑ其上にたなをかいていなだ姫をおかれけれハ八つの舟ゑことくかげがうつつて見ゆる程に、いけにゑハ是に有ぞと心得、八つのかしらごとがさけをのむ程に、めつくわとたべよつてせんごもしらすゑいたる所を、とつかのけんと申つるぎをもつて八つのかしらをいちくうちに御をとしあり、其を、御きりありたれハ、御けんのやきばしらみ、きれかね候程に、わつて御らんじけれバ、をの中に一つのつるぎ御座あつた。是ハあまの村雲のけんと申てかくれなき御けんにて御座候。其御くさなぎのけんと申も是にて有げに候。去間みことハ其後ミやづくりしていなだ姫ともるともにすませ給ふ。又仁王の御代となりてハけいかう第三の王子大和だけのみこととげんじ、其後こゝに地をしめて当社明神とあらハれ、其時のてなづちあしなづちハいまの源太夫の神とあらハれ、いまにいたつてとうかいだうをまもり給ふ。去程に当今につかへ御申有臣下殿御さんけいあれとのせんじをかうふり只今此所ゑ御下向にて候間、いかやうにもなくさめ申度とて、今夜ぶがくをそうし給ふべきとの御事なり。則源太夫の神ハ太鼓のやくにて候間、先たいこをもちて罷出て候。どこもとにをめてよからうぞ。大かた爰元かよさうな。太鼓ハをきすまいだが、それがしも是迄出て、たゝかへれハせんもない。御礼申て何ぞ一曲仕なぐさめ申さう。つねのことくれいをいふてまい有。うたひもつねのことく也。

## (27) 《小鍛冶》

か様に候者ハいなるの明神につかへ申末社の神にて候。扱も当社ハ王城のちんじゆにてとひあむせんにまもりれいげんあらたなる御神にて候。去程に只今是ゑ出る事よのぎにあらず。仁王六十六代一條のゐんこの程ふしぎの御つけましく、三条のこかぢ宗近に御

つるぎをうたせらるべきとて、ミちなりのきやうちよくしとしてせんじのをむきおほせつけられ候へハ、宗近ハせんじうけたまハつて申やう、かやうの一大事のぎよけんをうち申にハ、我等にをたらぬあいづちなくてハかなわす候とて、いろ／＼じたひ仕れども、りんげんあせのごとし、かつうはいゑのめんぼくと存、先御うけを申。今度のぎよけんハわたくしにハはかりがたし。神力を頼たてまつり申さんとて、則いなりの明神ハうぢがミなり。ことさらかぢをまもり給ふ神なれハきせい申さんとて、只今さんけい申所に、当社明神かりにどうじのすがたに現じ、宗近にいてむかひ御ことばをかわざれ候。そうしてけんのをこりハ神代よりつたわるれいけん二つあり。とつかのぎよけんと申は、そきのをのみこといづもの国ひのかわかみに大しやのありしをしたがゑ給ひしも、此けんのいとくなり。又村雲のけんと申も則其大じやのおにありしけんなり。仁王十二代けいこう天王第二の王子やまとたけのみこととういをたいらげ給ひしも此けんのいとくなり。それよりあらためくさなぎのけんとはを申。其上かんのかうその三尺のけん、かんしやうばくやがけん、もろこし我朝のけんのとく、こと／＼御物語候て、なんぢも名をゑたるかぢなれハ、何もおとらぬきよけんうつべきとの御事なり。たのもしく思ひかねをきたうてまつべし。其時節明神【明神】しゆつげん有、あいづちを御うちあるべきとの御事なれハ、宗近よるこびのまゆをひらき下向仕候。かやうにあらたなる御神なれハ、何事もいのりをかけ申程の事ハしよくわんしやうしゆうたかひなし。其分心得候へく。

(28) 《鵜羽》

か様に候者ハ、九州うどのいわ屋に仕へ申門守の神にて候。只今是へ出る事よのぎにあらず。めづらしからぬ申事にて候得とも、天

神七代地神五代の御神をハ、うのはふきあわせすの尊と申。其父の御神をハ、ひこほ、でミの尊と申候。其御神つりに御すき被成、あけくれ此沖におゐてつりをたれ給ふ。うの中にもゑせうの候。其はりをくひきつてこくうにうせ候。尊むねんにおほしめし、りうぐうへ尋行給へハ、こがねのいざごをしき、あたりもか、やくやうなるところにちつき給ふ。かつらの木の候。其したにちいさきいの候に、やごとない上らうの二人水をむすんで御入候間、尊かはゆふ思召、かつらの木のかげにたちより給へハかの上らうのやがてことばをかけ給ふ。是は此あたりにてハみなれ申さぬ御方にて候が、いづくよりきたり給ふ御方にて候ぞと尋給へハ、さん候、それがしハ地神四代ほ、でミの尊にて候が、つりばりを魚にとられ、このところまで尋きたりて候か、そのつりばりのゆくゑを尋くだされ候へかし。扱さやうにおほせらる、御方は、何と申御方にて候ぞと御申候得ハとよたま姫とこたへ給ふ。なんぼううめでたき事にて候ぞ。たがいに御心をうつされ夫婦のちぎりをなし、それよりやがて御尋候へば、いづれもとり申さぬよしを申上る。其中にくちめと申魚御返事を申さず候間、さあらハとあつて、かながゑらわきを見給へハ、あんのごとくはりの候をとり、尊に参らせられ候。又かんしゆまんしゆと申たまをそゑて参らせらる。其玉と申ハ、山をも海になし、海をも山になし、心のまゝなる玉にて候。扱夫婦のかたらひをなし給へハ、とよ玉姫程なく御くわいにん候。然らハ御さん屋のひばをかひへんにてときたまわふする。尊帰り給ひ御さん屋をかひへんにつくり給へと御やくそくにて、是なるかりどのを作り給ふ。又あれなる森をハうなでの森と申て、鵜のとまり候。鵜の羽をひろひかりどのを鵜の羽にて一方をふき、二方をふきもあわせざるに、尊御たんじやうならせ給ふに依て地神五代の御神をハ鵜の羽ふきあわ

せずの尊と申てめでたき御事にて候。先是ハ此所におき候ての子細、それに付当今に仕へ御申有大臣殿此所へ御下向にて候間、とよ玉姫うれしく思召、すかたをまみ多鶴の羽ふきあわせすのいわれをねんころにかたり給ひ、やがてまことのすがたをあらハしたまわふするとの事にて候。其間まちどをに御ざあらうする程に、我等ごとき者に罷出、一曲をもいたし御ねむりをさまし申せとの御事にて候間、是を罷出た。どこもとに御ざ有ぞ。参り様だいを見申さうすると存る。是に御ざ候よ。めでたき折からにて候程に、御礼を申さうと存る。御礼申。是ハ此所にすまひいたす門守の神にて候。是まではじめての御下向せんしうばんせいめてたう御ざ有。さいぜん御ことばをかわされたるやごとなき御方ハとよ玉姫にて御ざ候。しばらく御まち被成候へ。やがてまことのすがたを顕し見せ申さうするとの御事にて候。其間ハおまちどをに御ざあらうする間、我等に罷いで一曲仕り御ねむりをさまし申せとの御事にて候間、是へ罷出候。何そ一曲いたさうするか。いたすまいか。やあ。畏た。ごんごだうだん、日本一のおきけんに御礼申た。一曲いたさうかいたすまいかと申たれハ、とかくの御返事ハ御ざなく候が、よからうと思召やら左の方のほうかにこゝといたく。何をいたさうぞ。まひをまふた事が候程にかなでかなで、帰らう。目出度かりける時とかや。まい有。あらゝめでたやゝな。かゝるめてたき折からなれハ末社の神もあらハれ出てうたひかなで、是までなりとて末社の神ハゝもとのやしるに帰りけり。

## (29) 《道明寺》

罷出たるハかわちの国、はじめの寺七しやくわんじようのれいしんに仕へ申末社の神にて候。去程に此道明寺と申ハ天照大神をはじめたてまつり日本にかくれなきれいしんを七しやくわんじやう申、ま

ことにしゆしやうなるミやてらにて御ざ候。ことさら当寺のもくげんじゆのいわれハかんしやうせう四平のおとどのごんげんにより此所へながされ給ひ、しばらく御とうりうの間に、五ぶの大乗経をあそばし、御くやう有て此所ゑうづミ給ふ。其上より生出たる木をもくげんじゆと申。其木のみをとりて百八のじゆすとし、念佛百万べん申せハけつじやうわうじやううたがひなし。さあるに依て只今さがミの国たしるでらの住僧そんじやうと申人、しなの、国善光寺のによらいに参り、一七日こもりけつじやうわうじやうのきねんせられ候ところに、御れいむになんぢまことこのころざしあらハ、かわちの国はじめの寺に参り、もくげんじゆのみをとり数珠にしてねんぶつ百万べん申さハ、わうじやううたがひあるまじひとの御ぢげん有たるにより、只今此所へ御出候程に、諸神の御よろこびかぎりなくて、先しら太夫の神かりにあらハれ給ひ御ことばをかわされ、かさねてぎどくを見せ申さるべきとの御事なり。其間たゝハ何とて御さあらうするそ。我等がやうなる者にも罷出、何ぞ一曲仕なぐさめ申せとの御事により罷出て候間御礼を申。一曲いたさうと存る。れいをしてからうたひ舞つねのことく也。

## (30) 《和布荳》

是ハ長門の国はやもとの沖にすまひ仕るかいさうのせいにて候。扱もはやもとの明神にをみて御神事のかすあまた御ざ候中にも十二月大晦日の御神事をめかりの御神事と申てめでたき御じんばいなり。其ゆへハ則今夜とらのこくにりうじんたつなミまをわけてへいゝたるまさごとなし申され候を、其時かんぬし出て、たゑまつをとぼし、かいちうのめをかりしんぜんにそなへ申さるゝ御じんはいなり。さあるによつて御さいれいおほしといゑども今月みそかの御神事ハ神代よりわだすミのミやとへだてもなく御心をひとつにして



今にいたつて其れいうせずしてめでたい御神事なり。ことさらに此御代めでたけれハ、いよ／＼今夜の御じんばいをめでたきとおぼしめしりうぐうのひめミやしほづつほのおきなあらハれ出給ひ、かす／＼のたから物をさゞげかつがう申され候を、神主是を見付ふしんをなしていかなる人ぞと尋申されたれハ、りう女はいやしきあまおとめとこたへ給ふ。又翁ハたゞ此うら人のやうにこたへ御申有が、さりながらかりそめなれども、地神四代ひこほゞでミの尊よりの事を御物語なされ、いまのさゞげ物ハリうぐうよりとあつて天地ともにかつがうのあまおとめといひすて、雲井にのつてうせ給へハ、翁ハ其儘かいちうに入給ふ。なんぼうありがたき御事にて候ぞ。か様にきとくさま／＼御ざ有。しんぜんゑ罷出る事ひとへに此うらにすめハこそ此ありがたき御じんばいにあひ候へ。いやひとり事を申うちにはややう／＼めかりのじせつに罷成申て候間我等も是まで出て何事をもいたさねハ出たるせんもなく候が、何ぞそつと仕て帰りたいがなんでもあれ、それかし程ぶてうほうなる者ハ御ざない。さりながらいにしへそつとまいをまふた事が有程に一さしまふてもとのすミかへもどらはやと存る。目出度かりける時とかや。あら／＼めでたや／＼な。我らがやうなるかいさうまでも此しんぜんにうかミ出てじんびをおがミたてまつり／＼て、又かいちうにぞ入にける。

(31) 《九世戸》

罷出たる者ハ丹後国九世戸のもんじゆに仕へ申門守の神にて候。まことに申までハ御ざなけれど、当寺の大しやうももんもんじゆと申ハ天下にかくれなきもんじゆなり。其子細ハ天神七代地神五代と申が、地神二代の御神、此国ゑあまくだり末世のしゆじやうさいどのため天ぢくのごたいさん大しやうもんじゆを御くわんじやう有、九世戸と名付給ふ。すなわち九世戸と申も天神七代地神二代をもつ

て名付給ひしとなり。されハぼさつの蔵躰も大しやくの御さくなら。しかれハ此所にうつり御申候折ふしも、わだすみのミやに入給ひ、げかいをひろめ此嶋に御あがり有。其時御わたり被成たる所をしゝのわたりと申て今にかくれなく候。されハ、はしたてと申を御つくりあるべきとの御事なるに、其ころハ神よもとをからぬ御事なれハ、雲ぎりこくうにみちてとこやミのごとく有し程に、神／＼あつまり神火をとぼし、日夜につくりしやうじゆしたてまつれハ、松程めでたき物あるまじきとて、松をうゑおき給ふなり。又あれ成嶋を火をきの嶋と申も、其時の火をのこしをかけたる所なるに依て、火おきの嶋と申、なをも神代よりわだすミのミやとへだてもなく、龍神今にいたつてりうとうをさゞげ松のゑたにうつし給ふ。其時天人あまのとぼしびをおなじく松のゑだにならべ、天地ともにかつがうなざる、御事なり。さあるに依て、上ハうじやう、下ハげかいのりうぐうまでかくれなきれいちなり。か様の事人間もよく／＼存、国／＼在／＼所／＼よりしんがう仕り、参下向の人／＼ハおびた、しき事なり。忝も当今に仕へ御申有臣下殿きこしめし、只今御参けいに候間、たれあつて此所のやうだい申上るべき者あるまじきとて、さいしやうらうじん、りうぐうのひめミやかりの御すがたにてあらハれ神代の御事くわしく御物語なされ松のこかげに入給ひかさねてきどくを御めにかげ申さうするとの御事なり。其間我らも罷出、何にても一曲仕りなくさめ申せとの御事により、是まで出て候。急で御礼申さう。つねのことくせりふ、わか、まひ、うたひ同前也。

(32) 《江嶋》

か様に候者ハ、さがミの国江の嶋のてんぶに仕へ申、うのせいに候。去程に我朝ハせうこくとハ申せども、神国にて御座有により、国／＼にれいしんあまた地をしめてをわしますすによつていろ

くさまくめでたき事のいでき候。其しさいハ当嶋ゆじゆつし天女あらハれ給ふ御事、なにより以てめでたきためしなり。其やうだいをいかにと申に仁王三十代きんめい天わうの御代はしまつ(て)十三年卯月十三日うのこくよりもおなしく廿三日良のこくにいたるまでかうやなんかいこすいみなとのゑにうちあがり、うんかくらくおほい、だい(大)うしきりにふつて天地しんどうする事じうじつにあまれり。其のち一つの嶋ゆじゆつする。則ゑの嶋とかうす。其時うんしやうに天女あらハれ給ふ。今の弁才天にて御ざ候。去間むさしさがミの間ふじさわのちかくにミづうみ有。其ミづうみにこずりうといふ大じやすんで人をとる事かぎりなし。天部かのりうにむかひ、なんぢあくしんをひるがへし、此国のしゆごじんとなるならハ、ふうふのかたらひをなすへしと御申あれハ、かのりうよろこび、やがてふうふのかみとなり、たつのくちの明神とあらハれ給ふ。かゝるめでたきれいしんにてまします間、一度御まいりあれハ何事も思ひのまゝに御さあると申て、国くよりしんがういたし、参り下向の人ハおびたゝしき事にて候。去程に当今の臣下殿たうしまゑ御さんけいにて候間、我らも罷出御礼申さうと存るが、どこもとに御ざ有ぞ。されハこそ是に御ざ有。やれくきれいなる事かな。あの御まへ、此ていにてはいでられまいが、いやくくるしからぬ事、急で御礼を申さう。御礼申、きやうがつた者とおぼしめされうするが、当嶋にすむとりのせいにて候。只今の御参けいめでたう存る。それに付、我らも何にても一曲仕りなぐさめ申さうすると存て罷出て候が、一曲いたそうするか、いたすまいか、あゝかしこまつた。やれく一たんの御ぎげんじや、いそいで一曲を仕り、其上我等が身の上の事を申上げう。めでたかりける時とかや。いでくさらハ我等がいとくをかたり申さん。地神四代ほゝでミの尊、とよ玉姫とちぎ

りをなして、則くわいにんし給ひければ、御産屋をかいへんにたてをき給ひ、我等が羽にてふかれしかハ程なく尊むまれ給ふ。扱こそうのはふきあわせすの尊と申もこのほのいとく、又ハいかなるふち川ほらのをくまでも思ひのまゝにをひまいし、かつぎあげ、すくひあげひまなくをくう時ハ、つみもむくひもわすれはててくじやうぶつするこそうれしけれ。

(33) 《松尾》

か様に候者ハ、山しるの国にし山、松尾の明神に仕へ申末社の神にて候。只今是へ出る事よのぎにあらず。まことに日本ハ神国なれハ、れいしんあまた御ざ有とハ申ながら、とりわけ当社の御事ハ君のまぢかく御ちんごを被成、わういをじゆごし、天下あんせんに御まもり有御事なり。しかれハしんハはくわうのしゆごじんとしてほんぢじやつくわうの都を出てゑんふたいにぢげんし、こすひのねむりをさませ、国土のたみをゆたかにまもり給ふ。是ひとへにわくわうどうじんハけちゑんのはじめ、はつさうじやうだうはりもつのおわりを見せ給ふ。かるがゆへに神といふも佛といふもたゞ是すいはのことわりなり。所ハ九重のにし山のはにげんじ、ちけいまでもすぐれてむかいはさがの原、下ハおゝい川、其かわなミのをとま御申ある臣下殿、当社れいしんなるよしきこしめされ、只今当社ゑ御参けいにて候間、当社明神うれしく思召、まれ人に行合御申あり、かさねてきとくをおがませ御申あるべきとの御事、其間御まちどをに御ざあらうする間、我等にも罷出、何そ一曲仕りなぐさめ申せとの御事により、是まで出て候が、どこもとに御ざ有ぞしらぬよ。されハこそ是に御さ候。急て御礼申さう。御礼申候。つねのこくとくせりふ。うたひ・舞有。

## (34) 《雨月》

是ハせつしうすミよしの明神に仕へ申門守の神にて候。まことにめづらしからぬ事なれとも、国〱にれいしんあまた地をしめて御ざ候中にも、当社すミよしの明神ハいこくのゑびすをはらひ、こつかをあんせんにまもり給ふ御事なり。中にもわかかの道をもつばらにしゆごし給ふにより、西行法師当社を御参り候を、明神うれしく思召、松の下にいおりをむすび、うばとわうじとふうふにげんじをハしますところに、はや日もくる、程に西行法師いおりにたちよりやどをかり申され候へハ、こゝにうばとわうじとあらそひを仕。其子細ハ、わうちハ此いおりの屋ねをふくまじい、月をミやうする程にと申せハ、うばハいや〱あめのをとをきかうする間、屋ねをふかうと申。二人の中にふかうふくまいとのあらそひにて候が、それに付て則うたの下のくの御ざ候。其くハ、しづがのきはをふきぞわらずらうと、かやうに候程に此上のくを御つぎあらばそれをきいておやどをまいらすべきとおほせ候間、西行さあらハつけて見候ハんとて、かやうにつがれた。月はもれ、あめはたまれととにかくにしつがのきはをふきぞわつらう。明神ことのほかうれしくおほしめされ、あらおもしろのことばや、さあらばこなたを御入候へとてしやうじ入御申有、よもすがら哥のごくいども御物語なされた程、はやよもあけがたに、西行もすこしまどろミ給ひ、めさめてあたりを御らんするに、彼夫婦の人も見えず、ありしいおりもなく、しんぼくの松の下に御ざ有程に、西行ことのほかきもつぶしにてふしんなかばなる程に、我等ごときの門守の神にも罷出、みぎの子細を西行につげしらせよとのちよくをうけ、只今西行の御前を参るが、西行のふしんもつともにて候。されはこそ是に御ざ有よ。やがてしんちよくのとをり申さばやと存る。いかに西行を申候。是ハ当社に仕ゑ申

門守の神にて候。只今是へ出る事よのぎにあらず、おやどを参らせられたるわうぢうばハ忝も住吉大明神なり。御ミわかのとも人なれハ、かくちぐうをなし哥のごくいを御物語なされんがために、おやどをまいらせられて候得どもはや夜もあけがたになり候へハ、いますこしおほせられたき事の候、ひぢをおほせのこされたる間、我等に罷出す、め申せ、おほせのこされたる哥の事を只今ミや人にのりうつりおほせわたさるべきとの御事なり。よく〱心をしづめ御き、被成候へ。是ハたしかにしんちよくをうけ申わたし候ぞ。是を参るミや人ハしやうじんの御たくせんにて有べし。うたがひなく御き、あれ。かまいて其ぶんこゝろを候へ。〱

## (35) 《鶺鴒祭》

是ハのうしうけたの明神に仕へ申末社の神にて候。まことに国〱にれいぶつれいしやおほき中にも、当社けたの明神ハ日本第三の御やしるにて天下にかくれなきれいしんにて御ざ候。其むかし仁王の御代はじまつて十五代じんぐうくわうぐうのちよくをうけ、かんまんりやうくわのめいしゆをかいちうにしづめ、しゆふじぎいになし給ひ、おごるさんかんのたちまちたいらげ給ひ天下あんせん国土ゆたかになし給ふもひとへに当宮の御しんとくなり。去程に当社にをみて御神事さま〱御ざ候中にも、霜月初卯の御神事をとりわきめたいやうにとりおこなひ申候。其子細ハきどくなる事の御ざ有によつての事なり。其きどくと云は、先当国ゆのがうと申所へ正月朔日よりいづくともなくいけにゑにそなわるうの鳥とびきたり候を、所の者ども是こそ当年いけにゑにそなわる鳥よとてかつがういたしそだてをき、御神事に其鳥をにゑにそなへ申せは、其鶺鴒しよ人もおそれず、きざはしをそり〱とのぼり、則いけにへにそなわり神前にはをたれふしけるが、またたちかへりていしやうに下り

とびさりぬ。かやうにきどく御ざ有によつてとりわけめてたき御じ  
んばいと申なり。さあるによつて当今に仕ゑ御申有臣下殿、今日の  
御神事のやうだいを御らんあつて御そうもんあれとのぜんじをか  
むり、只今当社々御下向にて候ところに、当社夫婦の御神うれしく  
思召れ、かりにあらハれ給ひ御ことはをかわし当社のじんびあら  
く御物語なされ、先御帰りあつてぶがくをそうしかのまれ人を御  
なぐさめあらうするとの御事なり。其間御待どをに御さあらうする  
程に、我らごときの者にも罷出何そ一曲仕りなぐさめ申せとの御事  
により罷出て候か、どこもとに御ざ有ぞ。されはこそ是に御ざ候  
よ。急で御礼を申さう。御礼申候。つねのせりふ。うたひ、舞・あり。

## (36) 《玉井》

かやうに罷出たるハ海中にすむいたらがいにて候。只今はゑ出る  
事よのぎにてもなし。地神四代の御神ひこほ、でミの尊、わだすみ  
のミやこゑりんかうなされた其子細ハ、ほ、でみの尊つりに御すき  
被成、朝暮沖に出てつりをたれ給ひたるに、うるくすの中にもあく  
ぎよ有て、尊のつり針をくひきつてうせ候。しかも其針ハ御きやう  
だいの尊の針をかり給ひたる事なれハ、御帰り有てかくのごとく針  
をうをにくわれたる由御申候へハ兄尊の給にハ、いや其針ハ子細有  
針にて候間、是非御返しあれと仰られ候程に、さあらハすいぶん尋  
て御らんせられうするとして龍宮までいらせられ龍宮にてハくわうも  
んのまへにりんかう有、玉井のか、やくていを尊ゑいらん被成、あ  
まりのおもほゆさに桂の木のかげに立よりやすらい給ふ。然る所に  
豊玉姫たまより姫御兄弟は御出被成、桂のしたなる玉の井に立寄葉  
の水をむすばんとつるべをおろし、そこを御らんじけれハ、桂の木  
のかげに尊立寄て御ざ候が、玉井にうつりて見給ふ程にいかやう  
なる御かたぞと尋給へハ、さん候はハ日本の尊なるが、釣針をうを

にくわれ、是まで尋参たり。もしきやうのゆくゑを御存候ハ、尋  
てくだされ候へかしと仰けれハ、豊玉姫、やすき程の御事なり尋出  
して参せうする。御心やすく思召とて、はやたがひに御心うつされ  
やがてきうちうゑ御とも被成、夫婦の語ひをなし御申候間、かぞい  
ろのかみいつきかしづき給ふ事申もおろかなる御事なり。誠上く  
のめでたけれハ下くまでもめでたい程に、我等がやうなるかいと  
もをよび出しめでたうさかもりをいたさばやと存罷出て候、シカ  
く有、四五人出る。しゆゑんをなしてかいくしくもあわびが  
いをさかづきにいたらいのてうしを出し見めよきはまぐりの上ら  
うがいにおしやくをとらせ、みぎわにいたらかいすたれがいをかけ  
ならべこうばいぎになくうぐひすのとりがいの有明の、西にかたむ  
く月もあかがい、くもらぬ時をふくほらがいハ天地じんわうさとい  
となりてく納るかいちうに入にけり。

## (37) 《繪馬》

有かたやく納る御代のしるしとて、ほうらいの嶋よりも鬼こそ  
出て此者に、たから物をまいらせんや。先ハ目出度事にてハな  
いか。忝もおほいの御門の左大臣殿御参宮被成、さいくうに御つき  
候を二ばしらの御神取分うれしく思召れ、かりに人間と現じ夫婦あ  
らハれ出給ひ、御ことばを御かハし御申被成たところに大臣殿仰ら  
れごとにハ、此所の繪馬の事、いかやうなる子細ぞと御尋被成候  
間、其時二はしらの御神御へんとうにハ当所に繪馬をかける事ハ天  
たうより雨露のめぐみを以て草木のよしあしをあたへ給ふをもわき  
まへす。人間のあさましきにハマよひ候に依て繪馬をかけて其馬の  
色しなげに依て其年の草木をしらしめんために繪馬をかけられ候と  
ありのまゝに御物語被成てあれハ其時大臣殿の仰られ事にハさあら  
ハ当宮の御いくわうたゞしく候へハ、日もよき程にてらし雨をもよ

き程にふるやうに被成てよからうと仰られ候間、二ばしらの御神の御ぢやうにハ、もちろんおほせらるゝごとくさやうに有つべし候得共、天地はじまりしより此方有事を有やうになくして、今さら左様にハはかりがたき御事なり。さりながら、さ程に思召ことならハ絵馬を二つかけて念比にあまたの者にしらせ御申有らうするとの御事なり。かやうの目出度おりからなれハ、我等がやうなる鬼どももほうらいの嶋より罷出て宝物をうち出し、此君にさゝげ申さうすると存罷出て候。シカく、急で打出。宝來の嶋成く鬼のもつたからハ隠みに隠かき、打出のこづちしよぎやうむしよくくわつしこくにくわつたり。く。

(38)《七夕》

かやうに候者ハ、忝もミやうしやうと申ほしにて候。則それかしハ三光のほしの中にも第一のほしなり。其子細ハしゆしやうのぐわんをかなゑ万木千草につゆをそゝきて四季折くゝのめぐミをなすに依て天下おだやかにしてかミぜんより下万民にいたるまでたのしみ御代とまもる事、ひとへに三光のひかりあきらか成に依てなり。然るしゆミのしゝうをくるくゝと廻る事おこたりなし。めづらしからぬ事成ども、北州の日の廻る時ハ、南州のよとなる。惣而是ハしゆじやうの云事なり。さればしゆミのうゑより見渡せハ、夜もなく昼もなし。日中にハ東西南北もしれず、日の出る方を東とし、日のくるゝ方を西とす。しゝうを以てかくのことくなり。さ有に依て有無東西がせう有南北といゑり。か様に昼夜のへだてもなく、ほねをおり人間をまもる程に、それがしが氣にあハぬ者ハたちまちばちがあたらうすると思ふ事なり。かやうに存る上は、此ミやうしやうをあがめ奉、ついせうをしてたのむ者ハ一入くわほういミしくむびやうそくさいにまふらんと存候へども、しゆじやう是を心得ずし

て、むさどくわうじんをまつりはぐん九よのほしじつしやうなど、申をば人間がおぢおそれ候へども、それがしハおそるゝ者もなく、なんぞ今月今日ハ七夕と申て七夕の年に一夜あふ夜なりともちいる事、いかなれば若者も老たる者も高きもいやしきもよりあひて、りくしやのさゝげ物、其しなくゝをそなへうたひさかもりなんどして百首の哥をよミ色々ゝの遊びを任り、節句の中にもすぐれたる悦びなりとて上下万民の人ゝれうら金銀のきぬあやにしきをさゝげ、ものゝふハ具足太刀かたなまで思ひくゝ心くゝに手向をなす。其外いやしきしづのあまでもあさのころもをたむけ、又ぬぎかゑのなき袂なれば、きながらしほれたるころもなれども七夕にたむくるなどと申て色々ゝに慰め申候。かやうに心をかけ申事一入うら山しく存るばかりなり。我等もあかつき方こそ隙なく候へどもよいの程ハよばひほしとなり何方ゑもしのばハやと存づれども先くゝ七しやの遊びの中様くゝなれども、いつれもぶしやうぼしに候間、我心とうきにういて和哥をあげまひ遊ばハやと存、是まで出て候間、急和哥をあげまおうする。こよひ七夕あふよなり 舞有 こよひ七夕あふよなりとて、こゝやかしこによばいほし、くゝしてつるにのぞミをかなゑけり。

(39)《熱田》

是ハ尾州あつたの大明神に仕へ申末社の神にて候。誠めづらしからぬ御事なれども、当社あつたの大明神は靈現あらたなる御事なれば、日本第一の御神と号してなをくゝ都をふかくまもりたく思召、五月三日より八月八日までハ御やしるを出させられ、西の門に御ざ有に依て、西の門のがくをちんくわう門とうたれ候。又南の門ハかいさう門と申てがくの御ざ有たるに、其頃ハ南の門のまへ迄しほのさしあがりたるに、こうぼう大師御覽じて、がくの上、海の字を御

なをし有て字のつくりを上におき、へんのさんすいを下におかせられ候へハ、それよりしほが二十よちやうひき申て、今にかくのごとくなり。又東の門をしゆんかう門と申子細ハ、唐のげんそうくわうていやうきひのこんはくのありかを尋、ほうしといふ仙人を御語、当社まで尋来り、東の門をたゝきてやうきひ二度あひ奉り候。其折ふし春にてありし程に、春たゝく門なれハとて、しゆんかう門と申なり。扱当社におみて八つるきの宮と申ハ、神代の御時そさのおの尊出雲の国にて大じやをころし、尾の中にありし劔を取て、村雲のけんと名付、天照太神にまいらせられたりしに、其後仁王の御代となつて十二代けいかう天王第三の王子大和たけの尊、とういをせいばつに御下向の時、天照太神より彼劔を尊に給り、するかのくにかんばらにて、とういの夷十一万よき、かぶとをぬぎかうさんのていにもてなし、尊をたばかりかれのゝくさに火をかけ四方のかこみをなしせめけるに、尊彼劔にてあたりのくさをなぎはらい給へハ、ミやうくわハかへつて夷の方にもゑかゝり、十万よきハ時のまにほろびうせ、やすくとういをおさめ御帰りの時、さるしさいあつて其つるきを此所におさめ給ふ。さあるに依ていにしゑハ其御劔を村雲のけんと申奉りしか、とういを御たいじの時、くさをなぎ国をおさめ給ふにより、くさなぎのけんと名付御申候なり。去程に出雲の国にて御ころし被成たる大じや、くさなぎのけんにしうしんをなし申間、おなしすんにけんを七つうたせ、彼けんと一所にこめおき八劔のミやとも、又八劔の明神ともあがめ奉るなり。先是は当社におみての子細ハかくのごとく、只今当社ゑまれ人の御出にて候間罷出て御めにかゝり何にても一曲仕慰め申さばやと存、是まで出て候が、まれ人ハいつくに御さ有ぞ。さればこそ是に御ざ候よ。急で御札申さう。御札申候。是ハ当社明神に仕へ申末社の神にて候。只今

のご参詣ちかごろ目出度存る。最前当社明神嬉く思召、かりに姿をあらハし重て奇特をおがませ御申あらうするとの御事にて候。其間御待どをに御さあらうする間、何ぞ一曲仕慰め申せとの御事により罷出て候が、何と御ざあらうするぞ。やあ。畏た。やれく一だんの御さげんに申た。急て一かなていたさう。わか・まひ・うたひつねのことく。

(40) 《浦嶋》

か様に候者ハ、かいちうにすんで万年のよわひをたもつ亀の類くのせいにて候。去程に先此当社のいにしゑを尋に、むかしこのミづのゑの浦におみて浦嶋太郎と申人の御ざ有たるが、此おきに出つりをたれ給ひしに、有時大きな亀をつりあげられ候が、其亀ハかしらに寶玉をいたゞぎ、こうにハ五色の色をあらハし、誠に奇特なる亀にて候間、人くおほくあつまり、是ハめぐらしき事にて有程にもて遊びにいたさうすると申を、浦島太郎殿、いやくか様のものをむさとハいたさぬ事にて有とて、もとの沖へはなされ候得ハ二三日有ていかにもうつくしきひめぎミ一人来り、今度御たすけ有たるほうおんに、我すミかへ御とも申へきと申されし程に、浦島太郎殿もしんしやくせられ候へども、しきりにいぎない申程に、ぜひなく彼姫とつれだちまいられ候處に、龍宮ゑ御とも申され、色々のもてなしにて七日までとうりう被成、はやこきやうに帰り度由申されけれハ、其時玉手箱を一つ引出物に出し、かまいて此箱を御あけ候など申程に、とりてこきやうに帰り見給へハ、其いにしゑにかわり、七世のまごにあひ給ふ程に、ふしんに思ひ彼箱をあけて御らんあれハ、この年月のよあひを彼箱にふうじこめて出し候間、あくると一とにわかにとしよりびんひけハゆきのごとく、かほにハ四海のなミをたゞミ、はくはつの老人となり給ふ。扱ハ此箱をあけまし

き物おとこうくわい仕給へどもかなわす。いづれも此人ハ人間にてハ有まじいとて、神にいわひ奉り、たんしうミづのゑの浦嶋の明神とあがめ申候。それに付、当今の臣下殿勅使に只今此所へ御出にて候間、当社明神嬉々思召、先取あへすかりに出合給ひかさねてせんやくを君にさゝけ申されうするとして、先御帰りに被成た。かゝる目出度事ハ有まじく候間、我らが様成者も罷出一曲仕り、勅使を慰め申さうすると存、罷出て候。れいをいふ。又れいいわすにもする。目出度かりける時とかや。まい有。やらく目出度やくな。亀は万年のよあひをたもつ者なれば、我等がやうなる類くいまでも思ひのまゝにながいきせんと、悦びいきミく又海中にぞ入にける。

## (41) 《まないの原》

か様に候者ハ、丹後の国当社大神宮に仕ゑ申末社の神にて候。誠目出度御事にて候ぞ。当社神明と申ハ日本第一あまてらす御神なれハ、いきとしける者の此御めぐみをうけぬ者ハ御ぎなく候。去程に此所をまないの原と申子細ハ、仁王二十二代ゆりやく天王の御宇に日本神国たりといゑども当国にかぎり誠おそろしき魔国にて、鬼神どくちうやくわのごとくむらがりすでのよさまたげとなりしかば、くぎやう大じん此よしを聞及給ひ、そもん申され候得ハ、御門此よしきこしめし、忝もまるこのしんわうにいそぎ御たいじあれとの御事にて候へハ、しんわうりんげんにまかせ、すでにうつたち給ふ所に、忝も天より金子の御礼ふりくだり候を、則とりあげ御覧しけれハ、神明天下り給ふとまなにて書付此お山にふりくたりしかハ、扱ハ神明の神力有とて天たうにむかいとくしん被成候へハ、忝も天照太神天下り給ひ、神通の犬に御身をへんげ神力をそへ給ひ、三とせ三月が其間に、すまんぎの鬼神ともをのこさすせめほろほし給ひ、日本神国一同の御国となし給ひしより此方、まないの原

とハ名付給ふ。其後御宮作りたちおさまつて今の末世にいたるまで有難御事、申もおろかに御ぎ候。誠めづらしからぬ申事成ども国土世界万木千草にいたるまで、此御神の御しんとくをうけぬものハ御ぎなく候。先此所におるてのむかし物語。去程に当今に仕へ御申有臣下殿、只今此所へ御さんけい被成候處に、神明うれしく思召、かりにあらハれ出給ひ、大方じんびを御物語被成、先御帰りに被成た。重而ぶがくをそうして御慰めなされうするとの御事にて候。其間たゞハ何とて御ぎあらうするぞ。我等ごとき末社にも罷出一曲をもいたしなぐさめ申せとの御事により是まで罷出て候。まれ人ハどこもとに御ぎ有ぞ。さればこそ是に御ぎ候よ。急で御礼を申一曲いたさう。御礼申候。是ハ当社に仕ゑ申末社の神にて候。只今の御参詣近頃めでたう存る。最前当社の御神嬉々思召、かりにあらハれ当社のしんび大方御物被成、重而ぶかくをそうし御慰めあらうするとの御事にて候。其間御待どをに御ぎあらうする程に、我等ごときの末社にも罷出、一曲仕慰め申せとの御事により、是まで出て候が、何そ一曲いたさうするか、たゞし何と御ぎあらうするぞ。やあ。畏た。やれく一だんの御きげんに申た。こなたのほうがにこくといたいた。急で一かなでいたさう。目出度かりける時とかや。あらくめでたやくくな。かゝるめでたき折からなれハ、末社の神もあらハれ出てうたひかなて、是までなりとて末社の神ハくもとのすミかにかへりけり。

## (42) 《孫思遊》

か様に候者ハ、かいちうにすむろくすのせいにて候。いやおぬしたちハ何として出たるぞ。何とも子細ハしらねども、何事やらんめでたき事が有よしきゝたるに依て、先きゝたきに出て有よ。扱ハ其子細をしらぬか。おぬしかしつたらハいふてきかさしめ。さたの

かぎりそれをしらぬか。いや何ともしらぬ。さらハ語てきかせう。先大りうわうの御子御遊山をなされうすると思召、ちいさき青きへびになりて、けいすいのほとりの草村をあなたこなたゑはいまハリあそび給ふところに、わらんべどもが見付、やれ／＼こゝにうつくしきへびが有。いざうちころさんとてうちなやまし、きづつけ身よりちをいだし、すでに御命あやうかりしところに、そんしぼくといゑる仙人折ふしとをりあわせ、かのていを見て、もとよりぢひの御身なれハ、いたわしく思召、基まゝ其へびをこいうけ給ふ。わらんべどもハ殊外はらをたて、やれ／＼むざとしたる事をいふ人か有ものじや。中／＼やる事はならぬと申す。さあらハ此いしやうをとらす程に是にかゑてくれよとてころもをぬぎてあたへ給へハわらんべども悦び則へびをまいらせけれハ、彼へびにくすりをあたへ草村にはなち給ふにより御帰り有。まづハ扱あぶない事にてハなかつたか。さやうの事ハ只今こそきいたれ。もしうちころしなどしたらは龍宮の御なげき、其ほか我らこときの者まで気をつめ迷惑いたさうするに、此やうなる満足ハあるまひ。それ／＼、した／＼までもうれしい事じや。さてかのそんしぼくハ七さいの時よりがくにもとづき人となるにおよんで道をまなびとせいのしゆつをもとめ。いやくをきわめ。せいしきをさつし、ぢひをもつはらとし給ふゆゑ、此たびの御命をすくひ給ふ。それによつて大龍王御悦びかぎりなくて彼孫思逸をしやうじもてなしかしづき給ふ事、いふもおろかな事じやがさりながら是ハ尤にてと有と思ふが何と思ふぞ。是ハいかやうにも御ちさうなされいでかなわぬ事じや。かやうのめでたき折からわ、我等かやうなる者ともさかもりなどしてなぐさまふと思ふ。それハ一だんよからう。うたふつまふつしてあそばう。やら／＼めでたや／＼な。君の御じゆみやうハ我等がうろこのかす／＼かさね

／＼にいわひたてまつり、是までなりとてうろくすのせい。／＼もとのかいちうに入にけり。

## (43) 《持統》

そも／＼是ハきのぶでいに仕へ申官人にて候。此君けんわうにてましますにより、ふくかぜゑだをならさす、たミとざしせず、まことにめでたき御代なれば、天人もあまくたり、仙人も山より出、参内仕る。中にもはうそと申仙人参内申ところに、なんしハいかやうなる者ぞと御尋なされ候へハ、しうのぼくわうにつかゑしじどうと申者なり。人のそねミにより、ゆゑなきことにてつけんざんにるざいの者なるが、我七百さいをふる事、ほうわうに御つげの子細有て、はつひつの駒にのり四天ぢくりやうじゆせんにいたり、たゑなるミやうもんをほとけよりじきにさづかり毎日おこない給ひ、此二くのげと申ハ、しゆきやうをたもつ御事なれば、君御じゆみやうちやうおんにながくさかゑ給ふなり。我等もいにしへわういにかなひししるしに、君の御かたミの子細あつて、毎日きくのはにかきつけとなへ候へは、いつとなく七百さいをたもつなり。其きくのはをてつけんざんのかわゑすてしに、其きくすいなんりやうけんといふところゑながれいでしをぶくすればじゆみやうをながくたもつよしそらもんす。君もきどくになると思召、なんりやうけんゑきやうがうあつて其きくすいをぶくし、御じゆみやうをたもたばやと思召れ候。やう／＼なんりやうけんゑきやうがうなざる、程に、皆／＼のこらすぐぶし給へとの御事なり。其分心ゑ候へ／＼。

## (44) 《西王母》

抑是ハしうのほくわうに仕へ申官人にて候。此君けんわうにてましますにより、ふくかぜゑだをならさす、たミとざしせず、まことにめでたき御代にて候。ことにはつひきのこまにめされりやうじゆ



せんにいたり、ほとけよりじぎにふもんぼんのにくのげをさつかり給ひ、何事も思召まゝの御代にて候。又今日ハこのでんゑぎやうかうなり、御ゆふあるべしとの御事にて候間、皆く此てんゑ参内申され候へ、其分心得候へく。扱もく先ハ目出度御事かな。君此でんゑぎやうがうなり、色く様くの御ゆふともにて候。ことに国く在く所くより色く目出度事どもそうもん申、其内に女しやう一人参内申、そうもん申へきことの候と申さるゝ。いかなる者ぞと仰候へハ、いかにも見事成桃の花をもちて参り候が、是を君にさくけもの申上る。此桃の花をいかにと尋に、是ハ三千年に一どかたゑだにハ花さき、かたゑだにはみのなる西王母のその、桃にて候が、此春にあつて花咲候程に、先花をさくけ申。かやうの事も此君の御いくわうゆしくましませばこそ此じせつにめぐりあひ給ふ御事なれハひとへに目出たうこそ候へ。然らハかさねて桃のみをもち参内申さくげ申べきとの御事なり。則此も、一つきこしめされ候へハ三千年のよあひを御たもち有。東坊作と申仙人ハ此桃を三つまでたべられ、はや九千歳をたもたれ候由承り候。去程に彼西王母の桃をさくげ申されうするはうたがひあるましい程に、君其桃をきこしめされ候ハ、御寿命ハ思召まゝにながかるべき事まことに以てめでたき御事なり。桃のみをこそきこしめさるべけれ。さねをバのこしあらふする間、其さねをすわふりたりとも命ハ長かるべき程に、皆く百官どもてんでにしてさねをすわふりてハ下ゑくだし次第く又ハすわぶりくあるハ五百八十年又ハ百年二百年のよあひをたもつべき事ハうたがひあるましいとの御事にて候。然ハ彼西王母参内申され候をたハ何とて御待有べきぞ。くわんげんをそうしていよくわうぼの心をもいさめ、くじやくほうわうかれうびん三足のせいてうなんとまでもいさみ悦びことく参内申やうに

との御事なり。各くくわんげんのやくしや、急で参内申され候へとの御事にて候ぞ。とうく参内申され候ゑ。其分心得候へく。

(45) 《東坊作》

か様に候者ハかんのぶていに仕へ申官人にて候。此君けんわうにてましますにより、吹風ゑだをならさず、民とさしをさくす、誠めでたき御代にて候。然ハ此程ハあをき鳥のあしの三つ候か御殿の上をとり廻り候程に、いかやうなる子細ぞとはかせをめしてうらなわせられ候へハ、君のためけしからず目出度御すいさうと申上る。又ことおほしと申せとも、今月今日ハ七夕のせちゑにて候程に、しやうくわてんに御行有て、御遊ふ有べきとの御事にて候間皆く此しやうくわてんゑ参内申され候へ。其分心得候へく。そうもん申さんとはいかやうなる者ぞ。それハちかごろめでたき御事にて候。やがて其由そうもん申さうするにて候間、それにしハらく御待ち候へ。いかにそうもん申候。此国のかたわらに住たミにて候が、君のため目出度御すいさうの候間、そうもん申さんため参内申たる由申候。畏て候。さいぜんの人の渡り候か。おほせのとをり申て候へハ、先ていしやうまで参内あれとの御事にて候。かうく御とをり候得。是ハ此国のかたはらに住仙人にて候。只今此所ゑ出る事よのきにてもなし。めでめでたき子細の候程に罷出て候。や、めんくハ何とて出たるぞ。おぬしが出たるに依て先皆くも出て有よ。扱ハ子細をしらぬか。中くしらぬ。しらすハ語てきかせう。語てきかさしめ。先目出度いふハ此程あをき鳥のあしの三つ有が御てんの上をとり廻り候程に皆く気もをつぶし、いかやうなるけしやうぞとはかせにうらなわせられ候へハ、はかせうらかたに引合申やう、是ハ君のためけしからず目出度御すいさうと申上る。扱ハ目出度事

かなとて各々御よろこびハかぎりなし。其めでたい子細ハ西王母のそのの桃とて三千年に一度かたゑだにハ花さき、かたゑだにはみのなる桃、此春花さきみなり候を、則其桃をもち君にさげ申さうするとの案内の鳥にて候が、彼鳥西王母てうあいなきれ候が、さきだつて御てんにとびきたり候。彼桃を一つぶくすれハ三千年のよあひをたもつなり。其せうこにハ東坊作と申仙人ハ、此桃を三つまでたべられ九千歳をたもち申さるゝ。此たび桃をさげ申され候ハ、其ゆざんにもかゝらうかと存て出て有よ。それハめでたいことじや。それならハとうゆふてくれいで、だしぬいてわごりよばかりで出たなふ。さだめてたくさんにハあるまい程に、わごりよたちハかう事ハなるまいぞ。いや是へ出た者ハいかやうなる者ぞ。扱めんくちちハいかやうなる御方ぞ。皆く仙人にて有よ。それがしも其類いにて有。名乗てさかせう。抑是ハ西王母のその、桃のなかに有とうにんとハ我事なり。扱ハ西王母のその、桃のとうにんにて有か。中くとうにんのせい成が、此君の御代めでたきゆゑ三千年に一どかたゑだに花咲、かたゑだにみの成桃を君にさげ申さうするとて案内をそうもんす。惣てめでたき折からにハけんじんも谷より出る。此度出すハ出る事が有まいと思ふて、さきだつて出て候よ。子細ことく承て候。何も其とをりにてあらうする。其桃をぶくする事ハ我等ごときの者ハなるまひ程にねぶられてくれさしめ。是ハいかな事、皆くおねぶりをやつたらハちいさくならうがめいわくな。いかにちいさくならても寿命ハ長からうぞ。めいわくなれともねぶられ申さう。皆く今のをおききやつたか。ぶくするこゝとハなるまい程に、さねをねぶり申さう。一段尤しや。いざさらハねぶらう。たゝねぶる處でハない。うたひぶしにかゝつてねぶらう。おゝさらハねぶらんとて、くおほぜい中にとりこめて、まづ

我さきにとすゝみけり。其時とうにんひざまづるてくかしらをし出し待かけけれハ、寄てハねぶるかへりてハねぶり、あまりにつよくねぶられて、かしらハちいさくなりぬれと、命ハ長きとうにんのかくせいハわうぼのみもとに参りけり

## (46)《養老》

か様に罷出たるハ、どうしうのかたはらに住む者にて候。さる程にもとすのかうりに養老のたきと申て、めでたきくすりの水出て仕候。其様だいハいにしゑおいたるおやをもちたるわかき者の有つるが、彼者たぐひなきおやかうくなる者にて候へども、けいくわい人の事なれハ、あけくれ山ぢへわけ入、薪を取てそれをしろないて老たのおやをやしない申たるが、有時彼者さんろのつかれにやすまんとて、たきのほとりに薪をおろしおき、すこしまどろミ、めさめてたきつぼにさがつて水をむすびたべてしはらくやすめハ、いつもやすみたるにハかわつてつかれもたすかり候程に、もとより彼者おやかうくなる者成ハ、其水をむすんで我が屋にもちて帰り、おひたるおやにたべさせく仕候へハかの老ふハ其水をたべて申やう、是ハつねの水にわあぢわひもかわりたり。其子細ハかんにたへたるあぢわひにて心もすゞしくして、何とやらんわかく成様におほへたるが、いかやう成水ぞと尋申せハ、子ハよろこびありのまゝに物語申されけれハ、ふしぎ成事と申て、おやこの者彼たきつほに行て思ひのまゝに水をたべ申候得ハ、らうふハまつさかりの者になり、子ハいよくわかく罷成候。是と申もおやかうくの心ざしにより、天たうのあたへぞと悦びかんるいをなかしたと承る。扱こそ老たのおやをやしなゑたる葉の水成ハとて養老のたきと申習し候。されハやうとくをおこなへハ鬼神是をほうし、やうあくをおこなゑば鬼神是をがいすと申。とかくよき事をたくめハ、天たうよりのあわ

れみをかうむると聞へ候。日本までにてもなし。かんのていたいぜうも薪をとりて老たるおやをはごくミ申されたと有。薪の事にハあらねどもぐしゆんハかたくななるちゝをうやまふと申も、皆かうくの子細にて候。か様のめでたい時節にむまれあふも、ひとへに有難き事にて候。参る程に則是こそ養老のたきなれ。まづハ扱見事成事かな。せいけつ成たきのやうだい申もおろかに候。見る程有がたふおほへて候。又有がたきもたうりかな。彼おやこの民ハつねの人に替り心しやうじきにして、ふうせいすいをんまでもあきらめ給へる人なれハ天しやうじきのかうべにやどる道理にて、かならず諸天やうが有、此山のさんじんごうハたきつぼのしゅごじんとなり、葉の水となし給ふかと存る程に、我らも急で葉の水をたべてわかくならハやと存る。一はいく又一はい。やらくめでたやくな。葉の水をほしいまゝにのミけれハ、びんのあたり、ひげのまわりがぞめいて、若男となつたるなり。か程めでたき事有まじと、是までなれや帰るぞとてくもとの在所急ぎける。

## (47) 《金札》

かやうに候者ハ山城の国おたぎのこうり伏見の里に住居仕る者にて候。去程に天下太平国土安せんに国おさまつてめでたきさいなり。其やうだいハ此伏見におゐて大宮作有べしとの御事により、忝も仁王五十代くわんむ天王の臣下殿此所へ御下向有て萬御覽被成、御そうもんあれとの御事にて、只今御付にて候ところにけしかるきね、みさきにすゝみ候程に、いつくより参たる者ぞと御尋あれハ、我は是伊勢の国、あこねの浦に住者なるが、わうほうをたつとミ是まで参たと申。それに付、大宮作り有べき事、いよく目出度しさいにて御ざ候。此宮作りたちおさまらハ、猶く国もゆたかに民もさかゑ上下万民そくさい安をんに何事もしよぐわん成就してめで

たかろうするにて候。去程に先木取のやうだい何くがよく御ざあるべきぞ。松ハちとせ久しき木にてあれハ、是ハいかゞ御ざあらうするぞ。車のためにハしいの木などもよく御ざある。扱はつきの木かきりの木か花の木なども候。榊ハいかに候得ハ、いゝや榊ハ神のやどり木にて御ざ有程になんど、しゆくくの御談合なかげに、天よりも金ねのみふだふり下るを、則勅使御覽じけれハ、伏見にすまんとちかいをなさるゝと候。扱伏見とハ何と心得給ふぞと仰候へハ、勅使のこともおろかなるとい事かな、此社の事よと御こたゑ候へハ、いゝや伏見とハ日本の惣名なり。いざなぎいざなミのみことあまのいわくらのこけむしろにて見いだされたる国なれば、あきつしまの名なりとて、其まゝみふだをおつとつて、こくうにうせ給ひし。是ハ伊勢の国あこねの浦にてハあまのふとたまの神にて渡り候。惣て此神ハ万神のまへの事をしゆくくとゝのゑ給ふ神なるが、則御礼のしゆくご神にて御ざ候。其時猶も我をあがめんとおもハ、大宮作りのそばにおしならべて御礼の宮を作るならハ、かならず様向有、いよく天下を御まもりあるべしとの御事なり。其むね心得て宮作り有べし。かまひて其分心得候へ。く。

## (48) 《大社》

かやうに候者ハ、此あたりに住居仕る者にて候。それかし存る子細有て毎月大社へ参り候。急ぎ参らばやと存る。去程に当月ハよの国くくにハ神無月と申。又此国の大社にハ神有月と申。是につき目出度子細の御座有など、聞申て候。我らハ存ぜぬが、則当月神有月にて候間、此ついでに神主殿に尋申さばやと存る。はやひとりごとを申内に参付て候。あら有難や、めでたう御かぐらをまいらせうするにて候。や、神主殿の御見ゑなく候。やがてよび出し申さう。いかに神主殿へ申候。御かぐらをまいらせ度候間、急御出候へや。誰

にて渡候ぞ。それかして候。やよう参らせられた。そなた程しんじやハまれに候よ。それがしもすいぶんしんを取やうに仕候。ちかごろにて候。さやうのしるしによりまへくよりうとくにならせられ御子息をもはんじやうにてめでたう候。去程に神主殿に申度事の候。何事にて候ぞ。承り候えハよの国くくにハ当月を神無月と申が又当国大社にハ神有月と申。此子細を語て御きかせ候へ。ふしん尤にて候。大方いわれを語てきかせ申さう。惣而さやうの事も大社に付ての子細にて候。其ゆゑハ日本六十六か国の神く当月ハ此大社ゑあつまり給ひ是にていよく天下おだやかにめでたうまもり給へと念比に仰合され凡又人間の男女夫婦の間のゑんを御さだめなさるゝ事にて候。なんぼう目出度子細にて候ぞ。よの国くくにハ神無月と申に此大社にハ当月神くくのあつまり給ふにより神有月と申さるほどに日本の御神我社くゝゑ御帰りの折ふしハ此月のすゑつかたにて候。中にも天竺より御様向の御神、是ハはやともの明神と申候。又あのむかいに見ゑたる太山ハ神あげの山と申。あの山ゑはやともの明神御あがり有て神くくに御帰りあれとて神のゑだをもつて彼方ゑかゑし給ふ。是に付ても目出度じんび有と申候へどもしんりよの事はくわしくハ申さぬ事にて候。先かくのごとくにて候よ。扱てハさ様の子細にて候か。いよくめでたき御事にて候。又いつものごとく御かぐらをまいらせて給り候へ。心得申て候。いかにいち殿ゑ申候。御かぐらをまいらせよと御申候間急て御出候へ。何と御かぐらをまいらせよと御申候か。中くの事。急御かぐらをまいらせられ候へ。心得申て候。はるかなるおきにもいしの有ものをゑびすのごぜのこしかけの石 おかぐらこそめでたうおりやらしませ。命長ちうようのそいてまもらせ給へ。

## (49)《氷室》

か様に候者ハ丹波の国くわたのこうり、此氷室の明神に仕ゑ申しんしよくの者にて候。去程に我てうハ小国とハ申せども神国にて、わうる目出度御国なれハ、何事も君思召まゝの御代にて候。然はいよくそくさいゑんめいのはかりことをめぐらし此お山に氷室をかまゑ、ひの物のぐごをそなゑ申され候へハ、いよく君あんせんは何事も思召まゝにめでたう御ざ有により、今にかくのごとくにて候。去問此氷室のいわれを尋申せばむかし仁王十二代慶好天王の御宇に御かりのくわう屋に一村の森のしたにいほりの有しを、御門ゑいらんなされし其頃ハ、さつきのすゑのころにて候ひしに、かんぼうしきりにふぎ、ぎよいの袖にうつり、さながら冬の野の御かりのごとく御ざ有たる程に、あやしく思召てゑいらんあれハ、雪氷をいゑのうちにつミたゝゑておき候程に、是ハいかなる事ぞと御尋あれハ、其時翁申やう、それせんかにハしぜつこうぜつとてむらさきのゆき、こうばいのゆき有。是則葉の雪なり。翁も此葉の雪をぶくするゆゑに、かやうに寿命長をんそくさい延命なりと申て則氷をくだきてぐごにそなゑ申。それより氷の物のぐごと申事はじまり、今にいたるまで其きちれいをもつてひの物のぐごをそなゑ申。なんぼうありがたき御事にて候ぞ。去程に当社の御しんとくのありがたきハ、当今亀山の院に仕ゑ御申有臣下殿、此氷室を御覧有べきため御ついでにてハ候へども、只今此所ゑ御つきの由を承り候程に、我等ごときの新しよくの者までも罷出御礼をも申さはやと存し是まで出候。急で御礼申さばやと存。御礼申。是は当社氷室の明神に仕へ申しよくの者にて候。当今の臣下殿御つきと承及候間、御礼申さんため罷出候。当社ハきどくじんべんの有神にて候。此氷室と申につきて今とても雪などこい候へハ時ならずともふり申程のき

どくじんべんの御神にて候間、御祈念有らうするにて候。我等ごとき  
の申事にて候間、まことしからぬと思召ハ、只今にても雪をこい  
ふらいて御目にかけるにて候が、何と御ざあらうするぞ。何と  
雪をこいふらいてミせよと仰候か。畏た。それがしまでもなく候。  
今一人我等がやう成社人御ざ候間、是をよび出し申さう。いかにい  
さしますか。誰にて渡り候ぞ。それがしにて候。何事の用にて候  
ぞ。只今当今亀山の院に仕ゑ御申有臣下殿、御ついでながら当社ゑ  
御参詣にて候。我等も礼を申たれハそれに付雪をこいふらいてミせ  
よと御申候間、其事にてよび出し候。いざさらハ雪をこわう。ゆき  
かうくくあられかうくくくく。さやうくふるハ。  
た、こわしめ。雪かうくくあられかうくく。あ、  
ふつたる雪かな。雪かうくくあられかうくく。あ、  
く。な。あ、した、かふつた。いざさらハ雪ころばかしせう。一だ  
んとよからう。雪ころばかしくあらさむやく。な。雪ころばかし  
くくまづはいかい物になつたな。もした、かな物になつた程  
に、いざさらばないじんころばかしれう。ゆきころばかしぐい  
りくくや。さゑいくりう。いざまた雪をこわう。ゆきかう  
くくあられかうくく我家のかきや木にふりやたまれかう  
く。

(50) 《竹生嶋》

か様に候者がうしう竹生嶋の天女に仕へ申者にて候。去程に国  
くこれいげんあらたなる天女あまた御ざ候中にも、かくれなきハ  
あきのいつくしま・てんのかハ・みのを・江の嶋・此竹生嶋、いづ  
れもかくれなきといひながら、取分当嶋の天女と申ハ、天下にかく  
れもなきれいげんあらたなる御事にて候により、国く在く所  
くよりしんがう申、参下向の人くハおびた、しき事にて候。中

にも今日ハ当今に仕へ御申有臣下殿、当嶋へ御参けいにて候程に、  
我等も御礼申さうすると存、罷出て候。どこもと御ざ有ぞ。されば  
こそ是に御ざ有よ。先ハきらびやかな事かな。あの御前ゑそれがし  
がやうなるいていなる姿にて御礼申ハいかゞな。いやくるしからぬ  
事、たゞ御礼申さう。御礼申候。是ハ当嶋の天女に仕へ申者にて  
候。只今の御参詣ちかごろめでたう存る。是へはじめて御参詣の御  
方ハ当嶋のたから物を御おがミ候が、さやうの御のぞミハ御ざなく  
候か。畏た。一段の御ぎげんに申上た。急で御たから物をおがませ  
申さう。是が御かぎにて御ざ有。是ハ天女のかんきんさる、御数  
珠にて候。ちといたゞかせられい。是ハうしの玉、むまのつ、是  
ハ火も水も取玉。是ハ又ふたまたの竹、是が当嶋一の御たから物に  
て候。是ハ七なんがわきげ、たから物ハかくのごとくにて候。又当  
嶋のじんびにおゐていわとびと申事が御ざ有が、是を仰付られうす  
るか。畏た。いでくいわとびはじめんとて、くいわの上にはし  
りあがりて東を見れば、にちりんぐわちりんてりか、やきて、西を  
見れば入日をまねき、あぶなさうなるいわの上よりくみなそこ  
すぶつと入にけり。あ、くつまめく。

(51) 《同竹生嶋》

か様に候者ハ江州竹生嶋の天女に仕ゑ申者にて候。申におよばず  
候へども当嶋と申ハ忝も仁王十二代慶好天王の御宇に、竹一夜の間  
にこんりんざいよりゆじゆつしたる嶋なるゆゑに竹しやうする嶋と  
かいて竹生嶋とよミ申候。其のちはるかに御代へだたつて仁王四十  
五代去子細有て天照太神聖武天王と御心をひとつにしてぎやうぎほ  
さつに勅使をたてられ則ぎやうぎぼさつの御ひらき有て御ほんぞん  
ハ久世観音にて御ざ候。又天女の御事ハぎやうぎぼさつの思召にハ  
か程たゑなる嶋にて有に後の世に女人けつかいなる事有べしとて、

天女をいわひ給ひたると申が、此天女と申ハいにしゑいまにいたるまで天下にかくれなきげんぜあんをんふくとくゑんまんにまもり給ふにより国く在く所くよりしんがういたし、参下向の人くハおびたしき御事にて候。さあるに依て只今延喜のせひ王に仕へ御申有臣下殿、当嶋へ御参詣にて候程に せりふいづれも存のことく也。

## (52) 《鬻龜》

是ハもろこしげんそうくわうていに仕へ申官人にて候。まことにこの君けんわうにてましませハ、ふく風ゑだをならさすたミとぞしをさす目出度御代にて候。去程に此君四季のせちゑの御まつり事おこたらずおびたしき御事なり。則当春もぶがくをそうしてたんしやうの千年の鬻万歳のりよくりふの龜までもまひ遊び申、めてたきまつり事にて候。おなじく今日もげつきうでんゑ参内申され候へ其分心得候へく。

## (53) 《皇帝》

かやうに候者ハもろこしたうのげんそうくわうていに仕ゑ申官人にて候。此君けんわうにてましますにより、ふく風ゑだをならさすたミとぞしせず。まことに目出度御代なり。去程に此君の御てうあひのきさき三千人御ざ候中にも、やうきひと申す御方ハならびなき御てうあいなるが、此程御のふにてましますにより、いかゞあるべきとの御きづかいにて、今日ハ此殿ゑぎやうがうなり、やうきひの御きしよくをゑいらんあるべきとの御事なり。皆くこのてんゑ参内申され候へ。其分心得候へく。

## (54) 《賀茂御田》

か様に候者ハ都かもの明神に仕申ししよくの者にて候。去程に当社におみて御神事の数あまた候中にも、今月今日の御神事ハ御田

うゑの御神事と申て目出度御神事にて候。や、漸いつもの時分になり申て候間、さうとめたちをよひ出し、御田をうゑさせ申さばやと存る。参らせ候くそれとしの年がうハよき年かうはじまつてしろかねの花さきこがねのミなりひらきじんもつ和合する時をもつてうやまつて申、それはのたねおろしハすくなふ候とも秋にならハ、せまちにせんぞく、まちにまんぞくたるべしと、まつりおさめてこゑをあげ、田うゑいさうとめ、うゑいさうとめ

## (55) 《白鬢道者》

か様に候者ハ江州白鬢の明神に仕へ申ししよくの者にて候。まことにめづらしからぬ事なれども、日本ハ小国なれども神国にてぶつぼうはんじやうしてめでたき御国にて候。中にも当社の御事ハごひやくさいより此かたぶつぼうをしゆごし給ひ、今にいたるまでれいげんあらたに御ざ候。去程に当社に我等こときの者とも数多御ざ候へとも当社といさきの明神のうわぶきをいたさうすると申て国くゑ罷出た。それがしハ此かいしやうをうけとつてくわんじんをいたす。今日ハ一だんの天気にて候程に、舟をこしらへ罷出てくわんじんをいたさうと存るくやむなだうしやうらむな おとこ明神に仕ゑ申ねんがうのかうをつむ事一千よかにち、一ぢきだんぢきたちぎやういぎやう、か程たつときくわんじんひぢりに、などかきどくのなかるべき、南無水神く

## (56) 《追松》

風ふけばおちゞと思ふかひもなくおともにゆかぬミぞつらき。夜ふかくも月の都をたち出てくあらしのおとの松のを、ひとりこがるゝからさきの松かさどもをひきつれて、猶ゆくすゑハ住吉の松のたちゑもひとつ成高砂のうらに付にけり。さすさかづきもときうつり、名残ハつきせぬいにしへ人かな、はや老若衆と思召どもつね

にハおとづれおわしませとの給へハ、いにしゑつくしにおわしまし  
て御そらことあからせ給ふや。いかでさやうに思ひ給ふべき、我  
ハかわらし是までなりと、いと申てたちかへれハ、たもとにすが  
りとどめ申せハ、げに名残有、西国ねんじやにちかづき給へ。都に  
有とても心ハかわらしたのめやくといふかすおほき、松かさとも  
をひきつれて、く、都へとてこそ帰りけれ。

注

- (1) 『国書総目録』第六巻 岩波書店 昭和四四年四月発行 四六一  
頁
- (2) 「名古屋狂言共同社所蔵山脇和泉家伝来九冊組間狂言本(一)」拙  
著 『名古屋芸能文化』第一三三号 名古屋芸能文化会 平成一五年  
一二月発行 九三―一二五頁

補記

貴重な間狂言本の閲覧・翻刻を許可下さった和泉流狂言方佐藤友彦師  
に心より感謝いたします。本稿は平成24年度科学研究費助成基盤研究  
(C)「東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とデータベース化」  
(研究代表者：飯塚恵理人、課題番号：23520256)による成果の一部と  
なります。

\* 文化情報学部 文化情報学科